



生物多様性が支える 私たちの暮らし

いのちはつながっている



今年、国連が定めた「国際生物多様性年」で、10月には、愛知県名古屋市で国連地球生きもの会議（生物多様性条約第10回締約国会議）が開催されました。

「生物多様性」は少し難しい言葉ですが、私たちにとって大切な言葉です。

●「生物多様性」とは

この地球上には、人間だけでなく、動物や植物など知られているだけで約175万種類、未発見の種を含めると3千万種の生き物が一緒に暮らしています。例えば、公園に咲く草花や、そこに集まる虫、そして、その虫

を食べる鳥たち。このように、多くの生き物がつながりあって生きていくことを「生物多様性」と言います。

●人間の生存に

欠かせない基盤

当たり前のことですが、人間は地球に生きる生き物の一つです。人間を含むすべての生き物は、他の多くの生き物と大気、水、土などで構成される環の中で、相互に関わりあって生きています。

もし、この地球上から森や小鳥、魚や昆虫などが消えてしまい、人間だけが

残ったと想像してみたらどうでしょう。立派なビルやITシステムが残っていても、人間は生きていけません。生物多様性は人間が生存するのに欠かせない基盤なのです。

●環境の変化に強く

安定した生活を守る

では、生存に必要な稲や小麦、牛や豚、綿や杉など、最小限の生き物があれば済むのでしょうか。寒かったり干ばつになったりと環境が変化したとき、少数の種しかない生態系はもろく、寒さや干ばつに強いなどの多様性があれば、その生態

系は安定しています。生物多様性は人間生活の安全性の長期的な保証につながっています。

人間に都合のよい種だけにすることは、どこかでしつぱ返しをくらいます。例えば、広葉樹はすぐに役立つからといってすべて切り倒し、建築、製紙用材になる杉や檜などの針葉樹だけにした場合、森林の保水力が落ち水害につながることがあります。水源が荒れると安全な飲み水が確保できなくなります。

また、生物相互のバランスを無視して限られた種だけにすると、被害が拡大しやすくなります。例えば、一面りんご畑にして昆虫などを農薬で殺した場合、りんごの害虫が大発生してしまいうケースがあります。いろいろな植物、それを食べる昆虫、さらにそれを食べる昆虫など多様な生き物が地域に存在していれば、りんごは少し食べられてしま

●食品や薬として役立つ

さらに「人間にとって有用な価値を持つ」点も重要です。人間はいろいろな農作物、家畜、魚などを食品として利用しています。

味や香りがそれぞれ違う果物を季節に応じて味わうこともできます。食べるだけでなく、工業材料や医薬品にも活用しています。途上国の多くでは、木材や家畜のふんは貴重な燃料となっています。医療でもさまざまな生き物が多く漢方薬として役立ついるほ



→世界自然遺産に登録された屋久島のシンボル・縄文杉

か、アオカビから抗生物質のペニシリンが生まれたのはよく知られています。また、散歩やハイキング、登山などで多様な生き物が息づく自然に親しむことで、ストレスに疲れた精神を落ち着かせ、明日への活力となります。

●豊かな文化を育てる

「豊かな文化の源」となっている点も忘れてはなりません。他の動物を捕獲したり、植物を採取するために工夫することで人間は知恵をつけ、文化を育ててきました。例えば、魚の種類によって漁獲方法はそれぞれ違います。生では食べられない植物も煮たりあく取りすることで食用になります。こうした知恵が積み重なって文化の基礎となったと言えます。

また、春に野の花が咲いているのを見たり、秋に赤トンボが飛ぶのを見て季節を実感します。野の花やト

ンボを食べることはないけれど、それによって豊かな感性や季節感が養われます。そうした感性から短歌や俳句、音楽、絵画などの芸術が生まれ、人間生活を豊かにしています。

●人間が加速させている

絶滅のスピード

約40億年前、生命が誕生して以来、多くの種が生まれました。しかし、近年の人口の爆発的な増加と人類による開発によって絶滅のスピードはどんどん加速しています。「種の宝庫」といわれる熱帯雨林は大幅に減少し、日本でも多くの種が絶滅の危機に直面しています。2008年9月、人工繁殖された10羽のトキ（学名ニッポニア・ニッポン）が放鳥され、新潟県の佐渡の空を27年ぶりに舞いました。乱獲や環境悪化によって日本産最後のトキ「キン」が死んでから5年後の



→日本産最後のトキ「キン」
（佐渡トキ保護センター提供）

●開発ですみかを追われる豊かな緑に覆われた日本の自然。南北に長く多様な

うかもしれませんが、害虫の大発生は抑制できます。つまり、多様な種が生存している環境は、変化に強く安定した環境と言えます。

気候と複雑な地形に適應した多くの動植物が生息し、固有種の比率が高いのが特徴です。しかし、日本列島に住むほ乳類の2割以上、は虫類、両生類の約3割が絶滅危惧種として選定されており、各地で悲鳴を上げています。こうした危機の原因は何でしょうか。

第1の原因は人間による開発です。戦後、原野を切り開いて道路や工場、団地を建設、干潟を埋立てコンクリートにしてみました。そこにいた生き物は逃げ出すか、絶滅しました。また、乱獲により絶滅に追いやられた種もいます。

●外來種や有毒な化学物質

第3の原因はブラックバスやマンギースなどの外来種や、ダイオキシンといった化学物質などの影響です。

●しのびよる 地球温暖化の影響 深刻化する地球環境問題も、長期的には生物多様性に影響を及ぼす可能性が高いのです。こうした原因は相互に作用しながら、生物多様性を脅かしており、日本の生物多様性を守るのは国民一人ひとりが自覚することが大切です。生き物の悲鳴に耳を傾け、何が大事かを考えて行動することが求められています。

6 図 生活環境課 ☎820・560